Ⅳ　多様性を尊重する生徒を育てる中学校での指導

1　多様性を尊重する生徒を育てる中学校での指導

中学校三年間の生徒の心身の発達は著しく、一人一人の生徒の能力や適性、興味や関心も多様化し、価値観の形成も周囲の影響を受けながら進展する。この時期には、価値判断の基礎となるものが形成され、将来の生き方にも影響を与える。

世界に目を向ければ、多文化共生の時代である。さまざまな宗教、言語、文化など社会や集団の多様性のみならず、ジェンダーや障害の有無など個人の多様性も尊重されることが求められている。このような共生社会を目指す社会の構成員の一員として、これからの社会を生き抜いていく中学生に、多様性を尊重する心や態度、実践力を育成するためには、生徒の発達段階を考慮し、ものの見方や考え方などを理論的に学習させることと様々な人や文化に直接触れ合い体験的に学習させることを重層的に行うことが必要である。

中学校で多様性を尊重する生徒を育てるためには、次のような教育活動を通して身に付けさせることができると考える。

(1) 学校の教育活動全体を通して人間としての生き方についての考えを深めさせ、様々な人や自然とふれあう機会を増やし、豊かな人間性を育成する。

(2) グローバルな視野を持ち、異なる価値観や文化など多様性を認め、様々な人たちとコミュニケーションできる力を育成する。

(3) 人々がどのように仕事を選択し、社会的責任を果たしているか学習し、自分の将来を考え、社会の多様性について理解する。

(4) 地域行事への参加、ボランティア活動などを通して、社会の一員としての自覚をもち、自分の行動に責任をもつことができる力を育成する。

以下、これらのそれぞれの教育活動について、実践事例と具体的な実践方法を提言する。

2　違いを認め尊重する学級・学校づくり

生徒が学校生活を送る基盤となるものが学級である。学級は、各教科の授業を受ける場であり、学校生活を送る基礎的な生活の場である。個々の生徒の関係や個々の生徒と学級集団との関係は、生徒一人一人の学校生活そのものに大きな影響を与える。

学級の中には、様々な個性の生徒が存在する。その様々な個性を互いに理解することによって、個性を尊重し、共生することの大切さを学ぶことができる。

どんな学級を作っていくか、学級生活での課題をどのようにして解決してよりよい学級にしていくか、考え解決していくのは生徒自身である。話し合い活動などを通して互いの考えの共通点や相違点を明確にし、合意形成を図るための知恵を出し合い、意思決定をする。その過程で互いの考え方の違い、価値観の違いなど知り、合意形成のためにどのようにすることが良いか考えることによって、他を思う心を成長させ、ともに生きていることの大切さに気付くことができる。

集団で生活する学級や学校では、さまざまな軋轢が発生するが、そのことがいじめにつながらないように対処しなければならない。軋轢は、生徒同士の話し合いや自治的な活動によって解消させるようにする。仲間はずれなどのいじめに発展してしまった場合には、いじめられた生徒、いじめた生徒に対してそれぞれ話を聞き、いじめられた生徒の利益を第一として適切に対応をする。学級でいじめが起きた場合、学級活動での話し合いで問題を考えさせ、二度といじめを起こさない、見過ごさないという生徒の自覚を促すようにする。深刻ないじめに発展してしまった場合は、学校だけで解決するのではなく、教育委員会や警察などと連携して解決するようになる。深刻ないじめが起きないようにするためには、日々の生徒指導が大切であり、集団生活の中の軋轢を解決するため、学級活動での話し合い活動を重視していくようにする。

教師は、日々の学級での生徒の活動を観察し、生徒同士が互いを思いやり、違いを認め支え合える関係を作るため、特別活動や道徳科の指導を通して生徒が学級や学校の生活に適応し、健全な生活態度を身につけ、他者と共生しながら自己実現を図っていけるよう指導していくことが大切である。学級指導について、これまで培われてきた指導技術を、次代を担う教師を育成する中で伝えていくことが大切である。各学校では、校内研修会などを通して経験の豊富な教師から学級指導について具体的に学んでいくようにしたい。

3　多様性を尊重する心を育てる

平成31年度から中学校において特別の教科道徳が全面実施され、教科書を活用しての指導が始まる。道徳教育を通して、人間としての生き方を考えさせ、自らの判断で行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きていくための力、道徳性を育成するための取り組みが進められる。

中学校学習指導要領の道徳の内容には、多様性を尊重し、共生社会を生きる人間としての道徳性を育てるための項目が示されている。特に、「思いやり、感謝」「友情・信頼」「相互理解、寛容」「公正、公平、社会正義」「国際理解、国際貢献」の項目に多様性を尊重する心を育てる内容が示されている。そこに示されている内容を生徒に身に付けさせるために道徳科の授業を工夫し、学校教育活動全体を通じて多様性を尊重する生徒を育てていくようにする。これまで培ってきた道徳指導の方法を大切にし、教科書を活用し、協働的な学びを工夫し、生徒一人一人が積極的に学習に参加し、思索を深め、実践するよう導くようにする。

「友情、信頼」の項目では、互いの人間的な成長と幸せを願い、互いに高め合う関係である友情やその根底にある信頼について考えさせ、人間として最も豊かな人間関係であることを理解させる。中学生になると性差がはっきりし、異性への関心が強くなるとともにどのような関係でいることが望ましいか悩む時期である。互いの人格を尊重し、互いの人間としての成長を願うことについては、同性間の友情と変わらない人間関係であることを理解させ、互いのよい面を認め合うことの大切さを学ぶようにさせたい。

性差がはっきりとしてくる中学生の時期は、セクシャリティを自覚するようになる。身体

的性と性自認に違和感を抱いたり、性的指向が明確になり、自分の成長に戸惑いを感じたり、周囲との違和感を抱いたりする生徒が現れてくる。このようなセクシャルマイノリティの生徒に対して、これまでの学校は対応が不十分であった。これからは、セクシャルマイノリティの生徒の人権を尊重する取り組みを進めていくことが求められている。道徳科の指導において、異性についての理解を深めていく指導においてセクシャルマイノリティについて考慮することが必要である。標準服の着用、トイレの使用など様々な課題があるが、教育課程を含め学校全体で対応していくことが必要である。

現行の学習指導要領は、小学校一年生から中学生の段階まで、その発達段階に応じた指導内容が示され、関連付けがされている。小学校、中学校と学びを深め、高等学校や大学、社会に出て様々な経験を積み重ねていく中で、小・中学校で学んだことを改めて考え、自己の生き方や人間としての在り方を見つめ、多様性を尊重する人間として実践できるようにする。

4　多様性を学ぶ授業

異文化理解の授業は、国語科、社会科、音楽科、美術科、家庭科、英語科など様々な授業や総合的な学習の時間や特別活動で行うことができ、それらの学習を通して生徒は様々な異文化を理解し、多様性を学ぶことができる。

【英語科】

英語科における異文化理解には、異文化に関する知識を身に付けること、異文化に対して関心をもつこと、異文化間コミュニケーションを行うことの３側面がある。この３側面に沿ってどのような教材を使うか、どのように学ばせるか、学んだことをどう活用させるかということを考えて授業を展開し、異文化を理解させるようにする。

どのような教材を使うかに関して中学校学習指導要領の外国語の指導計画の作成と内容の取り扱いでは、「広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと」を学べるような教材を選択することと示されている。文化の多様性や価値の多様性に気づかせ、異文化を受容する態度を育てることを配慮し、「英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人」の日常生活や風俗習慣、地理や歴史、伝統文化や自然科学などから教材として適切な題材を選び授業を展開する。英語を「母語」として使用している人々だけでなく、英語を第二外国語として使用する人々、英語を外国語として学ぶ人々のそれぞれの国や地域に目を向けさせ、国際共通語としての英語を学ばせるようにする。

生徒が意欲的に学習に取り組むよう工夫し、学校内の学習だけでなく、学校外との関係を構築して学習する機会など作って学びを深めていくようにする。それらの学習を通して、文化の違いを理解し、相手の視点で考えるなどの柔軟な思考力や判断力をもち、多様なものの見方や考え方を受け入れる態度を育て、異文化理解を図ることができる。

英語科の学習だけではないが、世界には、様々な言語を使用し、様々な生き方をしている人々がいることを学ばせ、それぞれ異なった文化を尊重することの大切さを考えさせる。

参考　中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　英語編　2017 年 7 月　文部科学省

「異文化理解の授業を行うにあたって」酒井秀樹著 TEACHING ENGLISH NOW VOL.28 SUMMER 2014 三省堂

【社会科】

社会科の授業では、持続可能な社会を形成するため、地球的な課題の解決に向けて主体的に取り組む態度を養うことが求められている。中学校学習指導要社会科の改定の基本的な考えの一つとして、「主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度」を育成することが示された。持続可能な開発のための教育（ESD）や自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなどに関わる 17 のゴール（目標）からなる持続可能な開発目標（SDGs）に関連づけた学習の必要性が社会科学習の中に示されている。

ESD とは、「人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する現代社会における様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、もって持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動」（ESD 実施計画　2016 年 3 月 10 日決定　持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会）とされている。地球規模の持続可能性に関わる問題は、地域社会の問題にもつながっており、それらの問題を考えることにより、身近なところから行動を開始し、学びを実生活や社会変容へとつなげる学習を展開することができる。

SDGs とは、すべての人の尊厳が確保されるような世界の実現を目指して、世界中の様々な関係者が人類が取り組むべき諸課題を整理し策定したものであり、2030 年までの国際社会の共通目標である。2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」という文書の中で示された。ESD に示された持続可能な開発という理念を実現するための目標が SDGs に示されている。

多様性を尊重する心を育てる視点から SDGs の考え方を見ると次のようなことに関する目標が注目される。「全ての人の人権が尊重され、尊厳をもち、平等に、潜在能力を発揮できるようにする」「貧困と飢餓を終わらせ、ジェンダー平等を達成し、全ての人に、水と衛生、健康的な生活を保障する」「平和、公正で、恐怖と暴力のない、インクルーシブな世界を目指す」とあり、これらに関わる項目が、目標として示されている。

社会科では、地理的分野、歴史的分野、公民的分野を学習するとき、SDGs との関係を考えて授業展開することを工夫する必要がある。特に、公民的分野の「２　内容」の「D　私たちと国際社会の諸課題」の「(2) より良い社会を目指して」の学習は、中学校の社会科学習の最後に位置づけられている。その学習で、持続可能な社会を形成することに向け、課題を探究する活動を通して、私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題を考察、構想し、自分の考えを説明、論述することが求められている。どのような課題を設定するかは、生徒一人一人の興味や関心に基づいて決めるが、SDGs に示された目標の実現のための自己の役割などを考えさせることができる。このような学習を通して多様な価値観を理解し、

多様性を尊重する心を育てることができる。

5　異文化との交流

世界の様々な国や地域から来日して生活している在留外国人は、256 万 1848 人（中長期在留者 223 万 2026 人、特別永住者 32 万 9822 人、2017 年末、法務省入国管理局）おり、全国各地で地域の一員として仕事や学業に従事している。2017 年の来日観光客は、2869 万 1073 人（日本政府観光局）であり、その数は、年々、増加している。国際化の進展によって、在留外国人は、増加し、相互理解を深め、社会をつくる一員として共に歩んでいかなければならない。

学校においては、さまざまな機会を作って生徒と外国人と交流を深め、異文化理解を図り、共に生きるための自己の生き方を考えさせたい。

在留外国人の多い地域にある中学校には、在留外国人の子どもが通学し、共に学んでいる。通学してきている生徒のそれぞれの国の生活や文化、料理、スポーツなどを通して共通点や違いを学び、共に協力して学校や地域社会での生活を充実させる指導を進めている。

多くの地方自治体は、世界各国や地域と姉妹都市を結んで交流を深めている。中学生が姉妹都市に派遣され、派遣先の学校で学んだり、ホームステイしたりして日本とは違った生活や文化を学ぶ機会がある。派遣される生徒は、一部の生徒であるが、帰国した後、学習発表会などの学校行事の中で自分の経験を報告し、多くの生徒が異文化を知り、考える機会を得ることができる。また、姉妹都市の生徒が来日し、中学校で共に生活したり、ホームステイの受け入れ家庭となったりして交流を深める機会をもつこともある。学校全体として歓迎会を催したり、スポーツ交流を深めたりさまざまな交流を進めることができる。

中学校の生徒たちとの交流を積極的に進めている在日大使館もある。在日大使館や領事館は、東京などの都市部にあるので、地方にある学校は交流が難しいが、修学旅行やキャリア教育の一環として実施することができる。各大使館は、これから日本と各国との関係を担う若い世代に大使館施設の見学や職員との交流を通して各国に触れ、理解してもらう目的で行っている。

異文化に接する経験をした生徒は、外国語の学習に力を入れ、多様な言語を学ぶ課程のある高校へ進学し、大学で言語に関する学びを深め、学んだ言語能力を生かす職業を選択するなどキャリア形成につながっている。

「中学生の時、オーストラリアへ旅行し、現地の同じ年齢の子供達と遊びや交流を通して、日本の文化とオーストラリアの文化の異なる点について学んだ。また、ホストファミリーとの生活の中で家庭の習慣や食文化の違いについて学んだ。オーストラリアの文化を学んだことで、他の外国語の文化はどのように日本の文化と異なっているか、自分で知っていきたいと思った。そのため、大学では、フランス語を学んで、フランか文化と日本の文化の異なる部分をより深く知っていきたいと思った。」（大学 4 年生フランス語フランス文学科）

「中学生の時、語学研修があり、カナダへ行った。そこで一週間ほど大学の寮に泊まり、

午前中勉強、午後観光に行った。その中でホームビジットやホストマザーの前でソーラン節を演奏したり、日本の文化を伝えたりした。私は、竹とんぼづくりをやった。実際会話する中でもっと英語を話せるようになりたいと思った。コミュニケーションをとる時、積極的に話そうと思いようになった。」（大学 4 年生国語国文学科）

中学生の時に、学校代表として 2 週間中国に行くプログラムに参加した経験のある学生は、言葉で苦労したが、やってみることが大事と考え前向きになったと述べている。また、外国の人と交流することによって、視野が広がり、海外のニュースに目を向けるようになったとも述べている。事実を知って行動していく。異文化に接する経験を学校教育の中につくり、多様な価値を学ぶ機会を生徒に提供するようにしたい。また、そのような経験を生かし、将来、どのような仕事を選択し、社会的責任を果たしているか考え、社会の多様性について理解させたい。

6　より体験を深めて

中学生は、各教科や道徳、特別活動などの学習を通して、世界の多様性や様々な価値観を尊重することの重要性を理解することができるが、それをより確かなものとするためには、様々な体験を通して学びを積み重ねていくことが必要である。

特別支援学校は、近隣にある小・中・高等学校との交流や学校開放として公開講座・施設開放を積極的に行っている。近隣にある中学校は、積極的に交流を深め、生徒が特別支援学校に学ぶ生徒も自分と同じように夢や目標の実現のために努力していることを知り、互いに支え合いながら生きていくために何をしなければならないかを考え、行動できるようにしていかなければならない。

杉並区にある東京都立中央ろう学校は、杉並区の中学校と積極的な交流を進めている。部活や生徒会活動で交流し、区立中学校の文化祭で中央ろう学校生徒の美術作品を展示し、その素晴らしい作品を鑑賞する機会を得たこともある。野球部の交流では、それぞれのチームで対戦したり、各校メンバーを混ぜての試合を行ったりする。試合中はお互いにコミュニケーションを取り、技術力の向上を図り、交流を深めている。中央ろう学校の生徒は、杉並区中学校野球大会や卓球大会に参加し活躍している。杉並区には、杉並区立済美養護学校があり、近隣の中学校と音楽を通しての交流を深めている。また、杉並区では、障害のある人もない人もスポーツを一緒に楽しむことにより、相互のふれあいと相互理解を促進させ障害者福祉の向上を図ることを目的として「ふれあい運動会」が開催されている。そこでは、区立中学校の生徒がボランティアとして参加し、障害のある人とない人が一緒に行う競技の運営に協力している。このような体験をした生徒の中から、中学校を卒業した後も特別支援を必要な生徒や障害のある人と関わり、特別支援学校の教師や介護施設の介護福祉士として活躍しているものもいる。

様々な障害のある方から生き方や考え方、前向きに生きていることの大切さについての話や障害があって不便なことがあるので困っている場合には助けて欲しいということを直接伺

った中学生は、共に生きるとはどういうことか深く考え、行動に移すことができる。 地域の様々な組織や施設と連携を取り、体験を通しての学びを深め、共に生きるためにはどのようなことに力を尽くさなければならないか生徒に考えさせることは、生徒自身の生き方や人間としての在り方を考えさせ、社会の一員として責任を果たすことにつながっている。

7　多様な価値観を受け入れ、協働して課題を解決する

現代社会は、グローバル化が進展し、多様な人々や地域との結びつきが強くなり、多様な価値を受け入れ、共生していける社会を作ることが課題となっている。次代に生きる中学生には、多様な価値を受け入れ、自立した人間として他者とともによりよく生きていくことができる人間に成長することが期待されている。中学校で学ぶ様々な知識や技能が生徒たちの未来において生きて働くものとして身に付くよう指導をしていくことが求められている。生徒の発達段階を考慮し、知識や技能を理論的に学習させるとともに、様々な人や文化に触れ合う経験の中から他者と対話し協働しながら課題に対応する力やコミュニケーションする力など総合的な力を身に付けることができる。その中で、中学生に多様性を尊重する心や態度、実践力を育成していくことが可能であると考える。

人間尊重を基調として教育活動を進め、豊かな心を育んでいくためには、教師一人一人の人権感覚を磨くとともに、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のため、各教科等で指導を進めるとともに、教科等横断的な学習の充実が図られるようにしなければならない。校長は、リーダーシップを発揮し、多様性を尊重する生徒を育てる教育を組織的・計画的に推進するようカリキュラム・マネジメントを充実することが求められている。